

[論 文]

「一殺多生」について

— 柏木義円の発言に沿って —

市 川 浩 史*

要 旨

日露戦争当時、キリスト教伝道者柏木義円は、事実上主宰していた『上毛教界月報』誌上で、江戸時代の僧天海の作とされる説話を引用して「一殺多生の理」なるものを否定した。この「理」は一人の悪人を殺すことで多くの人々を救う、というものであった。周知のように、柏木は内村鑑三らと並んで日露戦争に際しては非戦論を力つよく提起していた。その文脈において一人の悪人を殺すとは、現実においては戦争、現今の日露戦争を含意していた。つまり、柏木は戦争によってさらに大きな善を生む、という理屈を否定したのである。戦争とは殺人であり、端的にいえば、種々の条件下では殺人を認めるという理解は、現実においては戦争を是認する考えかたに通ずる。そもそも人間とはいろいろな論理を挙げて多数の利益のために一人の命を殺すことを是認しがちではあるが、柏木は真っ向からこの考え方を否定したのである。この考えかたが、柏木義円の人間観の中心にあった。

Key words : 『上毛教界月報』, 非戦論, 柏木義円, 一殺多生, 宗教, 仏教思想

はじめに

日露戦争当時、いわゆる非戦論を展開する論者がいた。一部の社会主義者とキリスト者である。前者には、幸徳秋水ら、後者には内村鑑三、柏木義円らが含まれる。後者の人々は、十年前の日清戦争のときには、苦しんでいる多くの清国国民のためには腐敗した清朝政府を打倒することが有益であると信じ、義戦を主張していた。が、戦勝国である日本が清朝に対して行った戦後処理は、敗戦国である清国から多額の賠償金と領土の一部を奪うことで終わった。清国の国民は依然として戦前と同様の苦痛を味わい続けることになった。こうした事実を前に、内村、柏木らキリスト者の非戦論者が、かつて義戦の立場にあった自らを痛烈に自己批判し、ロシアとのあいだで戦端が開かれようとしているいま、相手や諸事情を超えて戦争自体を否定する非戦論に到達した(片野, 1993, 136)。

* 淑徳大学兼任講師, 群馬県立女子大学文学部名誉教授

本稿は、柏木義円の非戦論の一端を考察することで、その歴史的な意義について考えてみたい。この試みは、日露戦争期の柏木義円という人物の発言を通してその人間観を考察することである。当然ながら、そこには人を殺すことを事とする戦争のさなかに語られた、人間の本质にかかわる証言がある。

I 「非戦主義を宣明するは宗教の天職也」

群馬県安中の安中組合教会の牧師であった柏木義円（1860～1938）は、牧師として赴任した翌年の1898(明治31)年11月から上毛地区の組合教会所属の各個教会間の情報・連絡誌として『上毛教界月報』（以下、『月報』）を創刊し、その巻頭論文など殆どの記事を約40年にわたって執筆し続けた。その内容は、聖書からのメッセージであったり、その時々々の社会問題への提言であったりしたが、いずれも渾身の熱を帯びたものであった。

日露戦争のさなかの1904(明治37)年10月15日付『月報』第72号に「非戦主義を宣明するは宗教の天職也」（以下、「非戦」と略称）と題した論が掲載された。柏木の論説には、キリスト教関係の知識だけではなく、日本史のみならず欧米の歴史、中国史や仏教、儒教関係の知識が豊かであった。彼が越後・与板の真宗大谷派の寺院（柏木山西光寺）の出身である所以でもある。

1200字足らずのこの論文は、まず、天海が説いたという一つの譬喩を挙げて、殺人は罪悪であると述べる。そして悪に対しては善人が無抵抗の死をもって報いることで、却って数多の善人を生むことになる、と説いた。もちろん、この説は十字架上に死んだキリストのことを意味していた。さらに、ロシアのトルストイの説く絶対平和主義に基づく非戦の態度を貫くことが世界に平和をもたらすのだ、という。ついで結論として、「世界の平和を攪擾するものは其の責、実に此の種の宗教家に在るなり」と述べて終る。「此の種の宗教家」とは文脈上「正義の為と称して戦争を是認するの宗教家」のことである。このうち上に指摘した、天海が説いたという譬喩とは、「一殺多生の理」についてのものであった。天海（?～1643）は、江戸時代初期の天台宗の僧で、天台の教義から徳川家康を神として祀るという政治的宗教を構築することに貢献した人物である。この天海が説いたという「一殺多生の理」とは、つぎのようなものである。あるところに、稀代の毒薬を売る商人がいた。ある人がその商人を欺いてその毒を買った。その人は貴重な薬を手に入れたと称して、買ったばかりの毒を入れた茶を商人に飲ませて去った。毒を飲んだことを知らない商人は数町歩いたのち、毒が回ってそのまま斃れて死んだ。そこでその人は死んだ商人の懐中から数服の毒薬を回収して「莞爾微笑して曰く、可なり。一人を殺して数人を活かしたりと」。ある人は、毒薬売りの商人をその毒によって殺したことで、もしかすると殺されたであろう数人の命を救った、というのである（『月報』第72号）。天海関係の史料集である『慈眼大師全集』上・下（国書刊行会、1976）には上記の内容の説話を天海が語ったという史料を見出すことができないので、おそらくは「一殺多生」説は天海に帰すことはできないと思われる。なお、柏

木がこの〈伝・天海説〉をどのような書で知ったかはわからない。多読で多彩な知識を持った柏木のことであるから、何かの教訓書か歴史書などで読んだのかもしれない。

ともあれ、柏木は天海説として伝わった「一殺多生」説を紹介し、「殺して罪惡を世より根絶し得くんば此れも或は可ならん。然れども濱の砂は尽くるとも盗人の種は世に絶へざるなり。況んや血は血を以て洗ふ可らず。罪を生むものは罪なり。殺人既に罪惡なり。罪惡を以て罪惡を根絶せんとす。矛盾之れより甚しきはなし」と切って捨てた。一人の悪人を殺し去ることで多くの人々の命を救う、ということを実向から否定したのである、いとも簡単に、殺人なるが故に、とりわけ、「罪惡を世より根絶するを以て其の天職とする宗教家にして斯る思想を抱く者あらば此れ大なる誤謬」なのである。

しかし、「善人無抵抗にして悪人の手に斃る、も之に由て善人滅尽するものに非ず。一の善人、義に由て斃れて反て多くの善人は生ずるもの」である、かのステファノの無抵抗の死¹⁾を見よ、と（『月報』第72号）。

そして、世界中の宗教家が「悪に敵する勿れ²⁾」という「基督の聖訓」を真面目に守り、かの絶対平和主義のトルストイのように断固として戦争を非とするならば、今日世界に平和を来らすことは空しいものではない、しかるに今日の宗教家が正義のため、人道のために戦わなければならないと称し、神聖なる宗教の名によって幾多の「生靈」（人々）を惨殺することは決してあってはならない。ロシアの宗教、すなわちロシア正教はロシアを正しいものとする、日本の宗教（つまり仏教）は日本を正しいものとして、互いに「正義人道」のためにこの戦争を遂行せんとして煽り立てるのだ、「正義の為と称して戦争を是認するの宗教家は所謂目的は手段を神聖にすとの誤謬に陥て自ら知らざるものなり」、「宗教家にして愛国の念止み難く、国家の為に銃剣を執て起つ可なり。国家的観念に訴へて国家の士気を振作する亦、可なり。唯其の国家の為に平和主義の宗教をさへ戦争煽揚の具に利用するに至ては之れ亦、宗教の賊と謂ざる可らず。世界の平和を攪擾するものは其の責、実に此の種の宗教家に在るなり」として論を終える。

もっぱら柏木が批判して止まないのは、正義人道のために戦争を遂行する、と称し、その戦争を是認し、国家のためには、本来平和を追求する宗教をさえ戦争煽揚の具にすることであった。この当事者はロシアという国家、日本という国家、そしてロシア正教、仏教であった。この最後の仏教に関しては、冒頭の伝天海の説話によって譬喩的に説明されたのである。

Ⅱ 「一殺多生の理」

さて、ここで天海が語ったという「一殺多生の理」をあらわす説話を検討しておく。

ある人物が毒薬売りの商人、つまり（一人の）悪人を殺すことで、結果としてもしかするとその毒薬で殺されることになったかも知れない多数の人々を救った、という説話には、一人の悪人を殺人の犠牲にすることが、却って多数の生命を救う、というメッセージがある（『瑜伽師地論』

など)。

「一殺多生」とは、森章司編『国語のなかの仏教語辞典』（東京堂出版、1991）は「一人の悪人を殺して多くの命を救うこと。これから、大きな利益のために小善にも甘んじることをいう」。たしかに、毒薬売りの商人は、殺人を可能とする毒薬を売る悪人である。しかし、毒薬売りの商人を殺すことは、果たして「小善」なのだろうか。ちなみに、中村元『仏教語大辞典』（東京書籍、1981）は、「一人の悪人を殺して多数の者を生かすこと。多くの者を生かすためには、一つを殺すのもやむをえないという見解」と記す。「一殺」が「多生」となる、「一殺」は「多生」に等しい、というのが本来の意味とするのが妥当と考えられるので、この語句の解釈としては中村元説によるべきと思われる。とすれば、「一殺多生」は、一人の悪人を殺す（排除する）ことで、結果として多くの（善）人を救う、と解釈できる。多数の人々を救うために、悪人であれ、善人であれ、一人を殺すことは、けっして「小善」ではない。したがって、「一殺多生」という諺(?)の解釈としては、中村元説が妥当と考えられる。

柏木が天海の説として紹介した毒薬売りの商人の説話は、毒薬売りの商人という悪人一人を殺すことが、多数の人々の命を救うことになる、つまり、ロシアという国家の言動を是とすること（戦争）を抑止することになる、とつながってゆく。しかし、柏木はそこに止まってはいない。世の悪人は、この毒薬売りひとりではない、だからこの悪商人を一人殺したところで、世のなかに悪人がいなくなるわけではない、と。したがって、悪人を「殺す」ことは、世から悪を排除することにはつながらないというのである。「況んや血は血を以て洗ふ可らず。罪を生むものは罪なり」。要するに悪人一人を殺すことは罪であり、世から悪を排除することではない、殺人は殺人に過ぎない、戦争という殺人はただの悪にすぎない、というわけである。いくらロシアにはロシアを正しいとするロシアの宗教があるとしても、柏木の論理は一貫している。

この「非戦」が『月報』に掲載されたのは、1904年10月15日付けの第72号なので、実際に執筆されたのは、おそらくこの年の9月中と考えられる。とすれば、戦争の推移はまさに酣というべき時期であった。8月24日から9月4日にかけて遼陽会戦とされる戦闘があった。いわゆる満州南部におけるこの戦闘により、ロシアの総司令官クロボトキン率いる軍隊は遼陽を撤退し、奉天に退いた。日本軍が勝利を得たこの時期に、この戦争を非とする論が公にされたのである。おそらく戦争の行方は逐一国内に周知されていたから、柏木もこの事態をよく認識していたものと思われる。

そもそも「一殺多生」はどのようなものとして仏典中で展開されていたのだろうか。すでに指摘した通り、柏木は天海の説として述べたが、おそらく事実はそうではないと思われる。森章司、前掲書では、この考えの仏典中の典拠として『瑜伽師地論』、『大般涅槃経』などのいくつかの事例を挙げている。たとえば唯識思想の重要論書である『瑜伽師地論』ではどうか。該当箇所は、やや長くなるが、煩を厭わず引用すると、

謂はく、見劫に盜賊、財に貪するが為の故に多生を殺す、或は復た大徳、声聞、独覺、菩薩を害さんと欲す、或は復た多くの無間業を造らんと欲すに、是の事を見已るに発心、思惟す。我、若し彼の悪衆生の命を断たば那落迦に墮せん。如し其れ断たざれば無間業成りて大苦を受けん。我、寧ろ彼を殺して那落迦に墮さば、終に其れ無間業の苦を受けしめざらん。是の如く菩薩、意樂思惟す。彼の衆生に於て或は善心を、或は無記心を以て此の事を知り已らば、当来に故に深く慚愧を生ぜんと。慚愧の心を以て彼の命を断ぜば、是の因縁に由て菩薩戒、違犯する所無き所に於て多くの功德を生ぜん。……（『瑜伽師地論』卷第41）³⁾

（私、釈迦は過去において盜賊が財を貪るために多くの衆生を殺し、また徳の高い僧、つまり声聞、独覺や菩薩などの修行者を殺そうとしたのを見たし、また地獄に墮ちる原因を造ろうとしているのも見た。それらを見るにつけ、いろいろと思惟にふけて発心を遂げた。私もし悪人の命を断てば地獄に墮ちるだろう、また、若し命を断たなければ地獄に墮ちるべき罪を造って大いなる苦痛を受けるだろう。このように、菩薩よ、私は思惟に沈潜した。衆生については善き心を、また特定の判断をしない心でもってこうしたことを知るならば未来において深い慚愧を生じるだろう。その慚愧の心でもって悪人の命を断ぜば、その因縁によって菩薩戒を犯すことなく、多くの功德をなすだろう⁴⁾）

である。本来大乘經典は釈迦自身が説法をしている内容、という体裁であるから、文体の主語は釈迦である。釈迦が、盜賊が他人の財産を盗むために多くの人々を殺したり、修行者を殺害しようとしているのを見た。そこで私、釈迦は発心を遂げたのだ、その悪人を私が人々のために殺すとすれば私はその罪で地獄に墮ちる、また若しその悪人の命を断たなければ（多くの人々を苦しめる、という）大きな罪を造ることで地獄に墮ちることになるのだ。しかるに私が上記のこうしたことを了解するならば深い後悔をすることになる。しかし、悪人を殺しても戒律を犯すことにはならず、多くの功德を得るのだ、というものである。つまり、本来ならば多くの罪なき人々を殺す悪人を、多くの人々が苦しまないために私が殺しても、それは罪にはならないで、却って多くの功德になるのだ、として、殺人を正当化しているのである。

もちろん、この殺人正当化論は、単純な正当化論ではなく、多くの人々が殺されたり、苦痛に沈淪するようになったりするのを避けるために、そもそもの原因を造ったその悪人を殺すことは肯定されてよい、という、一種の方便の思想である。その意味で、回りくどい論理を辿ることで殺人が漸く肯定されるに至る、というわけである。すなわち、この殺人は、殺人の対象たる悪人以外の多くの人々の福祉のために一人の悪人の命を犠牲にする、その犠牲は当然肯定される、という論理の展開である。「一殺多生」というもの言いをしている以上、これは一人の命を犠牲にすることで、他の多くの人々を救う、という必然的に誰かの犠牲を肯定する論理であることがわかる。問題は、人を殺す実際の場である戦争という空間において、こうした「方便」が許されるべきものであるのか、ということである。また、誰かの命を救うために他の誰かの命が犠牲にな

ることが必然である、ということはいかなることか。さきに見た「殺人既に罪悪なり。罪悪を以て罪悪を根絶せんとす、矛盾之れより甚しきはなし」という柏木の論理は上記の『瑜伽師地論』の一節と比べるとすれば、いかに明白か、これ以上はない。柏木は背後の事情はなにであれ、悪人であれども殺人は殺人に過ぎない、という単純明白な事実を事実として認識したのである。柏木義円は「非戦」を執筆した際、戦争という殺人の本質を認識したうえで、(伝)天海説話を引用したものである。

Ⅲ 日蓮の場合

すでに柏木義円が、天海が語ったと伝えられた「一殺多生」の説話を考察したが、それは柏木によれば、戦争、つまり殺人行為というものに関して、仏教がいかなる見解を提示していたか、という点について明らかにしたものであった。しかし、伝天海の説だけでは仏教そのものが人を殺すということをいかに捉えていたかは依然判然とはしない。そこで、本節では、本稿全体の趣旨からみれば、やや横道には逸れることになるがいくらかでも凡そ仏教が当該問題をいかに捉えていたかを知るために、日蓮のそれを、見易い『立正安国論』を通して考察しておきたい。なぜならば、当該問題に関して、なんらかの発言が残されていること、近代以降、日蓮主義者の一部からテロリズムや、強烈な実力行為を是とする国粋主義者⁵⁾が一、二ならず輩出されていることなどによる。

ところで、日蓮の『立正安国論』⁶⁾は、1260(文応元)年に執筆された、初期の代表的著作である。「旅客」と「主人」との問答によって著者の考えが主に「主人」の口から語られる。冒頭、来たった「旅客」が、「近年」より「近日」、天変地異飢饉疫病が天下に遍満して、世が衰えている、この事態をもたらした原因は何か、なぜ仏法が機能していないのか、と「主人」に問うところからこの書が始まる。

「旅客」の質問に対する「主人」の答えの中心は、世の人が正しい仏法に背き、悉く悪法に帰依しているから、善神が国を捨てて去ってしまったからだ、という点に尽きる。以下、問答が続く。「主人」の思想は、第四番目の問答のなかの「後鳥羽の院の御宇に法然といふもの、選択集を作る、則ち一代の聖教を破し、遍く十方の衆生を迷はす」に集約される。つまり、現今の世の衰頹の原因は、後鳥羽院政時代に法然が世に出て、『選択本願念仏集』を著して専修念仏を広めたことだ、というのである。そして以下、いかにして法然義を批判し、自ら説く正しい法華経の教えを伝播させるか、という趣旨が展開される。

このうちの第六番目の問答に興味深い論点がある。「客」が、なかなか難しくよくわからないが、京都から鎌倉に至るまで仏教界にはそれなりの指導者がいるのに、なぜ専修念仏への弾圧を要請しないのか、あなたは卑賤の身、いうことは立派だが謂われがない、と言う。この問いかけに対し、「主人」は次のように答える。私はいささか仏教を学んでいる。涅槃経に「若し善比

丘ありて法を壊す者を見て、置て呵責し駈遣し拳処せざらんは、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。若し能く駈遣し、拳処せは是れ我弟子、真の声聞なり」(もしある僧が、法を破壊する者を見たままで責めもせずに放置するならば、その人は仏法中の怨敵であり、もしきちんと批判攻撃するならば、その人は私、釈迦の弟子、真の修行者である)とある。つまり、ここで釈迦は正しい法が破壊されるのを放置せずに「駈遣」(大漢和辞典によれば「追い出す」こと)するならばその人は私の弟子で真の修行者だ、と言い、正しい法を破壊する怨敵を「呵責」して「駈遣」することを奨励している。そしてその次の問答で、「客」が法然の教えが間違っていることはよくわかるが、具体策を教えてください、という。それに対して「主人」は、数点の經典の文言を挙げる。注目すべきはそのなかの涅槃經の文言である。

如来(釈迦)昔国王と為りて菩薩道を行ぜん時、そこばく(爾所)の婆羅門の命を断絶す。又云く、殺に三あり、謂く下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。……上殺とは父母乃至阿羅漢、辟支仏、畢定の菩薩なり……⁷⁾

つまり、釈迦はその前世において他の修行者(婆羅門)を殺したことがある、というのである。そもそも殺す・他の命を奪うということは、蟻の子を殺すことから始まり、父、母、修行者、菩薩を殺すことまであるので、と、ある研究者の解釈⁸⁾によれば、しかしこれは釈迦の「前世」のことであって、「釈尊の前世である婆羅門が仲間や群賊たちをも墮地獄の罪から救おうとして犯した殺害行為の事例である」。この殺害は肯定されているのである⁹⁾。いかに釈迦の「前世」のことであれ、いかなる事情があれ、この文言では他者を殺害することが明確に否定されているのではない。むしろ、(正しい法を破壊する者がいる、とかの)ある条件のもとでは殺害は許容されている、そのような理解、そして思想が存していたと解するのが妥当であろう。

さて、強烈な個性をもつ日蓮の場合、というよりむしろ大乘仏教においてきわめて大きな影響力をもった涅槃經に、他者を殺害することを肯定する記事があったこと¹⁰⁾はたいへん興味深い。すなわち、柏木義円が発見した、天海が説いたという、多くの人々の命を救うために毒薬売りを殺す、すなわち他者を殺害してもよいという説話の趣旨は、けっして(伝)天海だけのものではなく、大乘仏教には細い線¹¹⁾ながらも確実に存していた。柏木はこのことを知った上で、まぎれもなく戦争を殺人と明確に規定し、自らの信仰に基づき、それを絶対的に拒否、否定する論を展開したのである。

IV 再び「非戦」論文

この少し前、柏木が常に意識していた内村鑑三は「余は基督教の信者である。而かも其伝道師である、爾うして基督教は殺す勿れ、爾の敵を愛せよと教ふる者」¹²⁾と明快に述べていた。この

一文では内村は、戦争について何かを述べているのではなく、とにかく殺す勿れ、と命じているだけである。ただし、日本軍が日本海海戦に勝利したという報に接したとき、「帝国万歳」を三唱したという逸話も残っている¹³⁾。かくして内村の非戦論は評価が難しい。「一切の現世的関係を顧慮することなく、聖書の真理に依拠して社会的現実を批判したが、現世的関係をとらえ返すにはいたらず、既成の関係の継続を願うにとどまっている」¹⁴⁾からである。

では「非戦」論文はどうか。柏木は「現世的関係」「社会的現実」をいかにとらえていたのか。まず伝天海の「一殺多生」を語る説話を紹介し、もし「殺して罪悪を世より根絶し得くんば此れも或は可ならん」という。しかし現実はそのはずならず、「濱の砂は尽くるとも盗人の種は世に絶へざるなり」。つまり、戦争を起し、継続して、その挙句によし勝ったとしても、殺人という「盗人の種」（悪の種）は尽きない、というのである。これが柏木の目に映った現実である。「殺人

既に罪悪なり。罪悪を以て罪悪を根絶せん」という戦争は、要するに殺人の繰り返しにすぎないものであった。天海説話にいうように、「若し悪人を殺さずんば善人殲滅…と危疑するものあらば、此れ神の力を知らざるものにして不信仰の甚しきものなり」（『月報』第72号）と。ここで、天海説話のいうような「一殺多生」説は真っ向から否定された。「一殺」は「多生」を生むものでは決してないのである。たとえば条件付きで殺害行為を是認する『瑜伽師地論』の晦渋な論理のからくりや、『立正安国論』の釈迦前世譚などはここに一掃されるのである。悪人を殺さなければ、すなわち戦争という手段でなければもたらすことのできないと、或いは考えられた何らかの社会的価値（たとえば国際的な経済競争力など）は、戦争ではなく「神の力」によって達成されるはずなのだ、と柏木義円は考えた。「神の力」に依るオプティミズムの極致といえるが、これこそが柏木のいう「信仰」であった。

この「信仰」は、一見危うく見える。とりわけ社会的現実のなかでは、しかし、

一の善人、義に由て斃れて反て多くの善人は生ずるものなり。見よ、ステファノの無抵抗の死は敵魁保羅をさへ改心せしめたるに非ずや

という。ひとりの「善人」が死ぬと多くの善人を生じることにつながる。むろんこの発言には聖書の「よくよく言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」¹⁵⁾が踏まえられていたに違いない。一粒の麦は他の多くの麦の犠牲になった、無抵抗で。ステファノとは、「恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた」¹⁶⁾。ステファノは、当時キリスト者・キリスト教を執拗に攻撃しており、のちにはパウロ（保羅）となる初期キリスト教の熱心な伝道者サウロの敵であった。まさにステファノは「無抵抗」であったという。柏木によれば、「無抵抗」でのステファノの死は、のちにパウロ（保羅）を動かして「改心」せしめ、さらに後世のキリスト教の基となった。無抵抗での善人の死は、のちに多くの善人を生んでいった（多生）、ということになる。否、パウロよりも

特に「基督の無抵抗の死は数百数千数億の小基督を生じ、終に世界の罪惡を根絶せんとの希望洋々たるに非ずや」と続く。このように、柏木の見通しは、しかしながら今は日露戦争を止めることにはつながらず、「希望」ではあったが、ただ、トルストイのように「断乎として戦争を非認せば、今日と雖ども世界に平和を来すこと必ずしも空望に非るなり」。「希望」は「空望」ではないのだ、と。

そこで、「宗教家」の責務が説かれる。「露西亜の宗教は露西亜を正しとし、日本の宗教は日本を正しと、互に正義人道の名を以て戦争の煽動者となり了る」のが現実であった。この現実是否定されなければならない。なぜならば「正義の為と称して戦争を是認するの宗教家は所謂目的は手段を神聖にすとの誤謬に陥て自ら知らざるもの」であるから、戦争を正当化するために「正義」を持ち出してはならない、それは誤謬にすぎない、「宗教の賊」に過ぎない、と。

このように、柏木は戦争論を宗教論にも代え、宗教の論理からも戦争を非、とした。「非戦主義を宣明するは宗教の天職」である所以である。

おわりに

以上、柏木義円が非戦論の一環として、天海の語ったとする説話を引用して、戦争、すなわち人殺しを是とする論理を批判した。天海の曰く、「一殺多生の理」は、一人の悪人を殺すこと（戦争と理解できる）が多くの人々の命を救うことになる、というものであった。伝天海のこの説話、『涅槃経』『瑜伽師地論』などの経論にも同様の、殺人を正当化する論理が存在することは事実であることから、仏教には、ある条件下で「一殺」を是認する論理が存在していることを超えて、聖書のいう、無抵抗の人の善人が敢えて死を受容することで、多くの善人を生じる、というメッセージを柏木義円は受け入れた。この場合、善人の無抵抗の死と戦争との譬喩は譬喩として分かり易いものではないが、とにかく戦争を正当化するための論理を生み出してはならない、というのが柏木自身のメッセージとしてわれわれ読者は理解できる。戦争を正当化する偽の「正義」を往々にして目にするのであるが、真実を見通すことで戦争を非、としなければならないことを明らかにしたのである。

この点、柏木の非戦論のなかで、いわゆる伝統的な思想を否定的に紹介することを通して、とにかく殺人ということ自体を否定するという彼の思惟をより明らかにすることができた、と考える。筆者はこれまで『月報』所載の柏木の論文を点検してきたが、そのなかで上記のごとき重要な問題点を指摘するものである。

附 「愛国」について

柏木義円は「非戦」の後半において、「愛国」について言及している。哲学者フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte 1762～1814. 柏木の表記は、フヒテ）が祖国プロシヤのためにナポレオン率い

るフランスと戦ったことを挙げたが、その際、フィヒテーは自らの学説を曲げたのではなかったという。純粋に愛国心によって祖国のために戦ったのだ、と。柏木はこのフィヒテーの例によって、学者、宗教者とはいえど、愛国の念をもつことを否定しない。曰く「宗教家にして愛国の念止み難く、国家の為に銃剣を執て起つ可なり。」そして「国家的観念に訴へて国家の士気を振作する、亦可なり」。宗教家が愛国の念をもつこと、国家のために銃剣を執ることを柏木は否定しない。愛国の念（心）をもち、およびその愛国心に基づいて自らの国を護るために戦闘行為に従事することは、けっして民族主義者、国家主義者の専有物ではなく、凡ての国民に在ってもおかしくないことを柏木は認知している。「国家の為に銃剣を執て起つ可なり」。ただ、平和主義を是とする宗教を戦争を煽るための具とすることは「宗教の賊」だ、宗教を用いてはならない、と。

上記の引用から、愛国心あるいはナショナリズムと戦争というものは矛盾しない、という思惟を見て取れるのだが、現実の問題としてはどうか。ある国とある国とが抜き差しならない関係に陥ったという極限状態において、双方の国に愛国心をもつ国民がいる。したがって愛国心自体相対的なものであるのだが、一般論として、そこから戦闘に進むことは現実問題としてはあり得るのではないか。そのようなとき、柏木義円ならばどのように考えるのだろうか。現実問題としてどのような答えを出すのだろうか。

【注】

- 1) 新約聖書「使徒言行録」7章60節。「そして、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。こう言って、ステファノは眠りに就いた。」（新共同訳、以下同じ）
- 2) 新約聖書「マタイによる福音書」5章39節。
- 3) 大正新脩大蔵経第30巻、517ページb 8行～b21行。もと漢文、私に読み下した。
- 4) 私訳による。
- 5) 「一人一殺」を掲げた血盟団の井上日召（1886～1967）などがその代表例である。
- 6) 『昭和新修日蓮聖人遺文』第一巻（立正大学日蓮教学研究所、1952）。本文は漢文体、テキストに付された読みに従って読み下した。
- 7) 註6書、221ページ。
- 8) 三浦和浩「『立正安国論』における「釈迦の以前」と「能仁の以後」に関する一考察—仏典に見られる殺害肯定記事をめぐって—」（『桂林学叢』第25号、2013）。本稿の日蓮に関する記述にあたっては、この論に多くを負っている。記して謝する。
- 9) 三浦によれば、こうした殺害肯定は、「婆羅門の命を断絶しても良いのは釈尊の前世に限される…」と解釈されている。
- 10) 前掲三浦論文によれば、涅槃経のこうした文言、思想が展開されることになる背後の要因が指摘されている。
- 11) 圧倒的多数の經典に当該記事・思想がみられる、というわけではない、ということである。
- 12) 「近時雑感」（『内村鑑三全集』第11巻、初出は1903年9月24日）
- 13) 片野真佐子『孤憤のひと 柏木義円 天皇制とキリスト教』（新教出版社、1993）第四章 二「主戦論から非戦論へ」（136ページ）。

- 14) 片野, 前掲書, 第四章二「主戦論から非戦論へ」(133ページ).
- 15) 新約聖書「ヨハネによる福音書」12章24節.
- 16) 新約聖書「使徒言行録」6章8節.

【文献】

『上毛教界月報』(復刻版. 不二出版.)

市川浩史 (2016) 『柏木義円と親鸞』 ぺりかん社.

市川浩史 (2019～2022) 「柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿1～4」『群馬県立女子大学紀要』第40号～第43号.

片野真佐子 (1993) 『孤憤の人 柏木義円 天皇制とキリスト教』新教出版社.

三浦和浩 (2013) 「『立正安国論』における「釈迦の以前」と「能仁の以後」に関する一考察—仏典に見られる殺害肯定記事をめぐって—」『桂林学叢』第25号.

新約聖書 　 瑜伽師地論 　 涅槃経 　 立正安国論